

優秀賞

テーマ…多様性を認め合う社会をめざして 「助け、助けられ、私はみんなと生きていく」

広島県・盈進高等学校1年 小林菜摘

私は、幼いころ病気になる、右半身が不自由だ。だから私にはできないことが限られる。

私は中学1年のときから、仲の良い友だちと一緒にバス通学をしていた。中学2年の秋、その友だちからこう告げられた。「私、自転車通学にするね。バスよりも自転車のほうが時間を気にしなくてもいいし、風が気持ちいいんだ」。私が自転車を運転できたら、友だちと一緒に登下校できるのに……。涙があふれた。

幼いころ、自転車を買ってもらって、自由に運転する弟がうらやましくてたまらなかった。弟の自転車をまたいでみたことがある。しかし、右側のペダルがうまく踏み込めず、結局、あきらめた。とても悔しかった。みんなにとって当たり前のことができない。私はそれが嫌だった。私も、みんなと同じように何でもできたらよかったのに……。そう、何度も思った。

私は、自分にできることは何でもする。そう思って、できることは何でも挑戦してきた。中学生になって、学校の先輩たちの核兵器廃絶のための署名活動に胸打たれて、私も活動に参加した。灼熱の夏も雪が舞う冬も、街頭に立ち、行き交う方々に署名をお願いした。活動の一環として、被爆体験を聞く機会がある。この春、切明千枝子さんのお話を聞いた。彼女は現在87歳。原爆で学校の後輩を目の前で失い、遺体を自分の手で焼いたという。彼女の次の証言が、今も私の耳から離れない。

「私たちは夫婦ともに被爆者です。障がいのある子どもが生まれるのが怖くて※、『子どもはつくらないでおこう』と約束していました。でも、ある日、近所のお医者さんに言われたんですよ。『あなたたちの考えは、障がいのある人に対する差別ではないですか。いかなる命も

平等です』。切明さんご夫婦は、はっと思い直して、子どもを授かった。それまで私は、障がいがあることでまわりの人と比較し、自分がかか劣っていると感じていた。また、私と違う障がいのある人も比較対象で、私は無意識のうちに「私」を基準に、優劣をつけていたと思う。切明さんとの出会いで、私の意識が変わった。「すべての命は平等」。そうだ。命に優劣なんかない。だから、私は私。ありのままの私でいいんだ。自分を自分で貶めるなんてやってはいけないんだ。

学校生活では誰かに手伝ってもらうことが多い。重たい荷物を持っていると、同級生が「手伝うよ」と声をかけてくれる。ドアを開閉するとき、近くにいた誰かが「開けるよ」と言ってくれる。それに対して、私には少し、申し訳ない気持ちがあった。

ある日の数学の授業中。クラスの仲間が、「この問題、分からないんだけど……」と私に言った。私は「教えようか」と声をかけた。すると友だちが「ありがとう。助かった!」と言ってくれた。また、友だちが荷物をいっぱい持っていて大変そうなとき、私は「手伝うよ」と声をかけ、荷物を持った。このときも「ありがとう」と言われた。私は友だちからの「ありがとう!」が何よりもうれしい。特に、切明さんの被爆体験を聞いた後は、友だちに積極的に声をかける自分がいる。私にも、誰かの役に立つことができるのだと、自分に自信が持てるようになっていったのだと思う。

障がいがあることによって、悲しい思いをしているのは私だけではない。それぞれの障がい、それぞれの悩みをもって、それぞれが自分に向き合いながら、努力して生きている。だから私は、相手がどんな立場の人であろうが、まず相手のことを考え、互いの違いや個性を認め合って生きていきたい。

私の夢。英語を使って、異なる文化や習慣を学び、英語を使って生活すること。これまで私に尊い学びを授けてくれた被爆者の方や障がいのある方などの思いも、英語を使って発信したい。

誰もが助け、助けられる社会。それが「共に生きる」社会。私は、誰もが多様性を認め合う社会をつくる一人でありたい。

※公益財団法人放射線影響研究所の調査では、原爆被爆者の子どもにおける出生時障害またはその他の妊娠終結異常が統計的に有意に増加したという事実が認められています。